

障害者理解学習から見えてくるもの

～第1学年『総合的な学習の時間「福祉理解学習」』の取組から～

京都府城陽市立北城陽中学校 教頭 室田 美佳

I 実践に当たって

本校では、第1学年の「総合的な学習の時間」における年間テーマとして、「福祉理解学習」を掲げ学習に取り組んでいる。本校における「福祉理解学習」は古く、平成12・13年度京都府教育委員会教育実践パイロット校（総合的な学習の時間）の指定を受け、その後、学習指導要領の改訂が行われた平成15年から現在まで約20年間継続して取り組んでいるテーマである。

この「福祉理解学習」に取り組むに当たり、障害のある者と障害のない者が共に学び、互いに尊重し合い、人々の多様性を認め合える共生社会の担い手となる生徒の育成を目指すこととした。これを達成するため、ここ数年は、1学期はアイマスク体験等の「福祉体験学習」、2学期は高齢者福祉施設を訪問する「福祉交流学習」、3学期は車いすバスケットボール等を体験する「パラスポーツ体験学習」を実践している。また、より充実した福祉理解教育にするために障害のある方やパラアスリート等の外部講師を招聘している。

このレポートでは、第1学期「福祉体験学習」と第3学期「パラスポーツ体験学習」の取組に絞り報告する。

II 実践内容

I 第1学年総合的な学習の時間「福祉理解学習」

(1) 1学期「福祉体験学習」

①事前学習

- ・まず「福祉について」の導入として、他者への共感を高めることをねらいとして道徳の授業を行っている。教材は、星野富弘さんの絵を扱い、星野さんの生き方から、力強く生きていこうとする者への共感と援助の心情に迫っている。
- ・次は、主に障害の種類、ノーマライゼーション、共生社会について学習をした後、本校に設置されている特別支援学級「やまびこ学級」（知的障害、自閉・情緒障害の各学級）について理解教育を実施している。この学級の生徒は、考えるのに時間がかかったり、計算が得意でなかったり、思っていることをうまく伝えられなかったり、スポーツの面でもすぐにできなかったりする場合がある。そのため、一人一人の様々な課題に対応し、ゆっくりと時間を使い、丁寧に学習を進め、個に応じた方法で学んでいることに対する理解を深めている。
- ・事前学習の最終段階として、城陽市社会福祉協議会の方による、「私たちのまちの福祉について」と題する講演会を実施している。この講演会では、市の状況（障害者数・高齢者数等）について、福祉施設とその役割について等を聞き、障害があっても、高齢になっても「自分らしく、生きがいをもって、暮らすことができる」ことの大切さを学んでいる。また、「自分だったらどう思うか」「もし自分だったらどうしてほしいか」という気持ちを基に、相手を思いやる心で体験学習に臨むよう指導している。



②福祉体験学習・事後学習

- ・福祉体験学習の体験当日は、全校で「トライアルデイ」と定め、全校生徒が各学年の総合的な学習の時間のテーマに沿った体験学習を行っている。1年生は、クラス毎に1時間に一つずつ、3時間で三つの体験学習を行っている。体験する内容は年度により異なるが、車いす体験、点字とアイマスク体験、手話と要約筆記体験の講座を設けている。この体験講座の講師は、障害者、地域のボランティア団体やサークル、該当団体、城陽市社会福祉協議会に所属する団体等から約

20名を派遣していただいている。また、この体験学習に関わる機材や備品も、当該団体や市社会福祉協議会より借用している。

- ・以下は、福祉体験学習を終え、学んだことを感想文にまとめたものの一部である。

- A：体や目が不自由でも周りに優しい人や親切な人、助けてくれる人がいれば安心すると考えた。なぜなら、体験していく中で、自分が不安に感じるとき、いつでも頼れる人がいれば、ホッとしたからだ。これまでは、周りの人に助けてもらってばかりだった。これからは学びを活かして、障害がある方や周りの人から、自分のことを頼ってもらえるような人になりたい。
- B：障害があっても、自分らしく生きがいをもって暮らせる城陽にするためには、みんなの力が必要だとわかった。そして、「大丈夫ですか？」と声をかける勇気を持ちたい。
- C：障害のある人もない人も、すべての人がどうすれば安心してよりよい暮らしができるのかを考えたい。まずは、身近なところで、「できること」を探し、できることを丁寧にやっていきたい。



この学習を通して、新たな発見をし、今後の自分自身の目標とする姿を定め、決意を綴っている感想文が多かった。

③地域団体との連携

- ・「トライアルデイ」で実施する福祉体験学習の講師は、市社会福祉協議会に所属する団体等より派遣していただいている。例年、年度当初に、市社会福祉協議会が「福祉教育（福祉体験学習）研修・情報交換会」を開催している。この交換会には、関係団体と市内小中学校の担当者が参加し、昨年度の福祉体験学習の取組と今年度の福祉体験学習の計画と報告、及び交流を行っている。
- ・市社会福祉協議会が、福祉体験学習の窓口となり、講師の派遣や機材、備品の貸し出しが円滑に行われ、学校として取り組みやすいシステムが構築されている。

(2) 3学期「パラスポーツ体験学習」

①事前学習

- ・3学期は、「パラスポーツ体験学習」を実施している。パラリンピックの歴史とパラスポーツの種類について、タブレット端末を活用して調べ学習を行い、パラスポーツの試合やパラアスリートのインタビュー映像からパラスポーツへの理解を深めている。パラスポーツは、何か身体に障害があっても、補助道具を付けたり、使用したり、競技ルールを調整したりすることによって、誰もがスポーツ本来の楽しさを味わうことができることを学習している。
- ・共生社会の担い手となる生徒の育成を目指し、1、2学期の学習を踏まえ、誰もが快適に生活できる社会を目指して、ユニバーサルデザインについて学習に取り組んでいる。調べ学習を行い、一つの道具に絞ってミニレポートを作成し、また、作成したミニレポートを発展させ、さらに役立つような補助道具を考案しまとめている。「どんな人」の「どんな手助け」となるような道具があればよいか、当事者の立場となり深く考えることが焦点となり、この学習の山場となっている。



②体験学習・事後学習

- ・今年度は、パラスポーツ体験として二つの種目を実施予定である。一つ目は、ボッチャである。ボッチャはパラリンピックの正式種目で、特別支援学級の体育の授業において、ここ数年取り組

んでいる。二つ目は、車いすバスケットボールである。この車いすバスケットボールも長年取り組み、昨年度より、京都府文化スポーツ部スポーツ振興課・文化政策室主催の「京のスポーツ夢バンク」事業と連携し実施している。元パラリンピック日本代表選手とパラアスリートを派遣していただき、パラリンピックのエピソードや車いすバスケットボールへの思い、共生社会を生きる心構え等の講演をいただいた。その後、競技用車いすの操作方法、車いすバスケットボールのデモンストレーションと体験を行った。ここでは、障害の有無にかかわらず、スポーツを通して交流し、助け合いながら共に活動することの大切さを学び、障害者スポーツへの関心を深めることをねらいとしている。

- ・事後学習では、これまで学んできたことを感想文にまとめた。以下に、その一部を紹介する。

- A：今日の体験は、すごく勉強になった。車いすバスケットは普通のバスケットとは違う楽しさがあり、見ている人とも一緒にできるスポーツだと思った。
- B：車いすバスケットでは、やったことのない人に「やってみよう」という感情を抱かせるものだった。自分も熱中して取り組めるものを大切にして、周りに影響を与える人間になりたいと思った。
- C：車いすバスケットの試合を見ていると、自然と参加している気持ちになった。障害の壁を越え、障害のある人となんが共存する社会を生きていくために、障害のある人と積極的に関わっていききたい。



Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

- ・第1学年の総合的な学習の時間における学年テーマが、長年、同一テーマとして取り組んでいるため、フレームワークは固定されている。その中で、学習内容の精選が毎年行われ、生徒の実態と社会の課題に合わせた学習となっている。
- ・1年間の学習から、生徒が「共に生きる」という視点に立ち、社会生活の中で主体的に行動しようとする変容が見られた。また、人を思いやる気持ちや心温まる人との関わりから、感性が磨かれ、豊かな心を育む機会となっている。
- ・毎年、複数の地域関連団体と連携し、団体の関係者や障害者より直接学ぶ機会が、複数回にわたり確立している。単発の車いす体験やアイマスク体験等よりも、複数の体験をすることにより、視野や思考の深まりを可能にし、生徒に新たな気付きが見られる。
- ・障害者より必要な補助道具について説明を聞き、その必要性を理解するばかりではなく、生徒自ら補助道具を考案していくという学習の流れが構築されつつある。

2 今後の課題

- ・コロナ禍で取り組んだ新たな福祉理解学習を織り交ぜ、近未来のポストコロナ禍を想定し、これまでに取り組んできた福祉理解学習をどのように発展、継続させていくのかの検討が必要である。
- ・共生社会の形成を目指している社会情勢を鑑み、市内の支援学校との交流教育を模索してみる等の交流及び共同学習の視点に沿った学習内容の再編を試みる必要がある。
- ・福祉理解学習を実施する上で、学年会等で事前打ち合わせや研修を複数回行っているが、教師の基本的な知識不足が見られ、研修が不十分であった。
- ・事前学習や体験学習で得た知識や技能を活用して、3学期に取り組んでいる自分で補助道具を考案する活動を更に発展させ、地域や社会の課題解決に向けた新たな提案をするといった事後学習の内容の深化を検討する。